

歴史学会大会シンポジウム 2023

近現代の人間社会と自然をめぐるふるまい

2023年12月3日(日) 13:00-17:30

日本大学経済学部キャンパス7号館4階7041教室

／Zoomによるオンライン開催

歴史学会では年次大会の一環として、世界の歴史的事象について、地域横断的な視点に立ったシンポジウムを開催してまいりました。

2022年は古代から近世の呪術、奇跡、怪異を通して、各地の世界観や他者との関わり方を比較検討し、ヨーロッパ的な近代化の相対化を試みました。世界の各地で実践され続けてきた呪術的慣行や民間伝承が示唆したのは、地域や時代によって自然に対する価値観が大きく異なるということでした。

そこで2023年は、異なる自然観を持つ諸地域の接触・交流が活発になる近現代に、人々は自然に対してどのようにふるまい、共同体を作ってきたのか考察し、近代的価値観を乗り越えることを目指します。ヨーロッパとその植民地のアフリカ・東南アジア、そして中国を対象とし、科学技術とインフラ、経済、観光の観点から、人間と自然の関係を比較検討します。

世界の各地で人々は、それぞれの風土のなかで育まれた感性や、培われた知恵をもって、自然を捉え、向き合いながら、共同体を形成してきました。近代にヨーロッパで科学技術の進歩によって工業化が進むと、その影響はヨーロッパに植民地化されたアフリカやアジアにも及んだといわれています。しかし、ヨーロッパの知や経済は在来のもものと混ざり合っって現地社会に適用されていきましたし、ヨーロッパの影響が比較的少なかった地域もあります。また、繰り返される戦争や行き過ぎた開発が地球環境破壊を招き、人類の生活を脅かしている現在では、近代の所産である科学技術や資本主義の価値自体が大きく揺らぎ始めています。

すでに2000年には人間活動が地球環境を激変させてしまった「人新世」が到来した、という危機感が示されました。近年では、環境をめぐる意識の高まりが、草の根の環境保護運動や人々の消費行動の変容といった形で見られるようになっていきます。このような社会情勢のなかで、歴史研究もまた、人間社会のことだけではなく、人間が生きる空間としての自然にも目を向ける必要があるのではないのでしょうか。

本シンポジウムでは、人文科学と自然科学の協力にもとづく学際的視野から、人間と自然の関係を問い直し、その共生の道を探ります。